

斎藤 弥生（さいとう・やよい）

1、プロフィール

歩道短歌会の同人として長年活躍。佐藤佐太郎に師事。茂吉、佐太郎の写生に徹した雲水短歌を生涯追求した。よく分かる響きの良い歌は今も愛唱されている。

<生没>

1916(明治 45)年8月 24 日～1984(昭和 59)年1月 17 日

<代表作>

合同歌集『はるのやよひ』

遺歌集『独酌』

<青森との関わり>

北津軽郡鶴田町に生まれる。内務省岩木川改修事務所に勤務。昭和 17 年より青森県警察官。昭和 45 年退職。

2、作家解説

斎藤弥生(本名・彌衛門)は、明治 45 年8月 24 日北津軽郡鶴田町生まれ。青森県警察官として県内各署に勤務。津軽短歌社同人。板柳短歌会同人。歩道同人として精力的に作歌。自宅を開放して歌会を開くなど短歌の啓蒙にも尽力。

・2人乗りさとせば学童うなづきて振り返り見て歩いてゆけり

・人は右車は左と呼びかくる学童の声さはやかにして

・ぬるみたる茶を呑みほしてやれやれと駐在所1年生の月報出しぬ

職域詠であるが、あたたかく学童を見守る警察官の姿には感慨が深い。

・わが制服にアイロンをかけてゐる娘のしぐさはたちを1つ超えて愛しい

奥さんも歌を作り、この歌に詠んだ娘さんは歩道短歌会の同人として作歌に励む。

・大寒に向ひて痛む戦傷の脚さすりをり仮眠の室に

軍隊生活のために大好きな作歌の中断があり余儀無い空白は惜まれる。

- ・ひとすぢの光となりて岩木川悠々津軽の野を流れゆく
- ・みやしろの太鼓の音のとどろけばわが老残のちり払ひゆく

内務省岩木川改修事務所に勤務の体験者の抒情詩。作者は「歌は私の心」と強調。

- ・古希われの五臓六腑にしみてゆく昔勤めし村の地酒は
- ・酒の量自戒しへらすさびしさやあと幾年も生くるにあらじ
- ・長病める妻を思へば1人居の心はもろく酒に酔ひゆく

歌集『独酌』には牧水を髣髴とさせる酒の歌が多い。酒の好きな温厚な作者の歌。昭和万集には次の歌が収録されている。

- ・監房の勤務に耐ふる日々にしてただ定年を待つのみを吾
- ・新築の我が家成りて古妻と涙ぐましき半生思ほゆ

この頃(昭和 45 年頃)板柳町文化功労賞を受賞。

3、資料紹介

○遺歌集『独酌』

図書

194mm × 133mm

昭和5年より作歌。約 1000 余首の中から 435 首を年代順にまとめた遺歌集。詩情豊かな秀吟が多い。